

中本 忠子 [広島県推薦] (広島県広島市)

中本忠子氏は、家庭環境に恵まれない子供たちに手料理をふるまい続ける支援を、35年間の長きにわたり、何の報償も求めず、継続して実施し、これまでに200人以上の子供たちを非行から更生させています。

そのきっかけは、昭和57年、保護司として担当した少年の「シンナーを吸うと、お腹が減ってることを忘れられる」という一言から少年にご飯を食べさせたことに始まります。この少年は自分のようにお腹をすかせている友達を連れて来て、その友達がまた別の友達と来るようになり、やがて中本氏の自宅は、貧困家庭の子供や育児放棄にあった子供など、家庭に居場所がない子供たちが集まるようになりました。中本氏は、多い時には1日に3升近くのお米を炊いて、自らの生活費を切り詰め、毎日、子供たちに食事をつくり続け、子供たちの声に耳をかたむけ、更生に導いてきました。

平成16年からは、保護司、更生保護女性会員、地域の方々等の協力を得て、広島市中央公民館でも月に2回の食事会を開くようになりました。

後継者を育て、この活動を継続させていくため、平成27年には、NPO法人食べて語ろう会を設立、翌年新たな拠点を広島市内に開設し10人ほどのボランティアが子供たちの食事を作っています。

その活動は、地域と子供、保護者をつなげるとともに、「子供食堂」としても全国的に広がりつつあります。



行政、学校、地域関係者に「基町の家」披露



「基町の家」外観



湯崎広島県知事の訪問

■選考委員のコメント

中本氏の想いから始まった活動が地域や社会を動かししました。子供たちが立ち直る居場所として長年に渡った取組みは、現在の子供食堂の草分けとなり、これまで200人以上の子供たちの更生を支えました。最初から大きな組織、大きな予算はなくとも、ひとりの愛と志で子供たちの育成を支えることができる実践は評価できます。

[受賞者からの一言]

この度は、栄えある賞を戴きまして、身に余る事と有り難く思っております。誰からも助けてもらえず、万引きなどで何とか生きのびた少年たちを、放っておけませんでした。

いつからか、我が家は食べることができない子供たちで満杯になり、逆に私の居場所がありませんでした。

それでも毎日地域の皆さんに協力してもらいながら、食事提供をしました。最近では30年前に通っていた子供たちも立派に成人し、後輩たちの、立ち直りに協力してくれています。

今回の受賞は、支えてくれている皆と喜びを分かち合いたいと思っております。



表彰状の授与